

# 京都

KYOTO

## 不思議ふしぎ!?

京都に隠れた意外な秘密を紹介します

### 庶民の月見？

月冴える秋となりました。

京都には大沢池を始め、渡月橋、桂離宮、銀閣寺など歴史的な月の名所が溢れています。

しかしこれらはすべて皇族や権力者が愛でた月でした。では庶民はどこから月を楽しんだのでしょうか。実はその答えが町の名前に隠されています。京都には月の字の町名が結構あるのですが、その中にその名もずばり月見町という町が二カ所あります。その一つこそ庶民が楽しんだ月見の名所なのです。

場所は祇園甲部歌舞練場と東大路に挟まれたいわゆる祇園町南側付近。史料にはこの一帯が月見の名所で、祇園



月見町の境界を示す石標。隣の石柱は安井金毘羅宮の鳥居。



月光町の看板



月光稲荷社。賽銭箱がありません。理由は是非ご自分で確かめください。

社から南は樹木が生い茂り、東山から上る月が殊に素晴らしく「新更科」と呼ばれたと記されています。月見の名所、信州の更科に似ていると思われたようです。そのため多くの人が月見に訪れ、安井金毘羅宮から続く通りには床几が並べられ、「騒客墨客此地に聚まり夜更けまで月を賞しける」(「扁額軌範」とあります。庶民の笑声や賑やかな様子が目に浮かびます。

しかし同書は「追々地を開いて人家建続き、月を観るに地なく、終に新更科の名失たり」と続けています。有名になると人が集まり風情がなくな

なり、最期はその名を失うのも世の定めなのでしょう。月に因み、もう一つ月の町をご紹介します。JR二条駅の西側にある月光町です。ここは江戸時代以前、暦を改定する改暦所が置かれたところで、宮中が管理していた改暦を渋川春海以後幕府が管理するようになり、寛政七年(七九五)頃、この一帯約千五百坪が幕府の天文測(量地)となり天文台が置かれました。この天文台の屋敷神として勧請された稲荷神が現在の月光稲荷社です。我が国は長くここを通る子午線を基準として測量その他を行ない、

明治四年に東京の皇居を通る子午線に変更されるまで日本の標準でした。昔の暦は太陰暦といい、月の運行を基準としていたのです。月光町の名も領けますね。

仲秋の名月といいますが、旧暦の秋は七、八、九月で仲秋とはその中、つまり八月を指します。昔の日本人はこの仲秋だけでなく、翌九月の月とペアで楽しみました。旧暦九月十三日の月を「後の月」といい、八月と九月の両方の月を「二夜の月」として愛でたのです。現在では九月の満月と十月の満月二日前の月に当たりますね。名月と満月は違います。日々形を変えていく月のすべてに名前をつけ、深い精神性を見出した日本人の美意識を見習って、今年も現代の「二夜の月」を楽しんでみてください。

朋とする月を二夜の(へんつくくり) (北村季吟)

(京都学園大学非常勤講師 堤勇二)

歴史や文化、全てが源流へとたどり着く古都。京都を知ることには日本を理解すること。

京都好きを大好きに

京都検定

京都・観光文化検定試験 京都商工会議所